

# 令和6年度病害虫発生予察注意報第5号

令和6年7月17日  
愛知県

作物名：水稻

病害虫名：斑点米カメムシ類（イネカメムシ、カスミカメ類、クモヘリカメムシ等）

- 1 発生地域 県内全域
- 2 発生程度 多い
- 3 注意報発令の根拠

- (1) 7月上旬の巡回調査における本田のすくい取り調査（47地点94ほ場）において、斑点米カメムシ類の平均捕獲数が2.57頭（平年0.88頭、前年0.85頭）と、過去10年間で最も多かった（表1）。種ごとの捕獲数は、イネカメムシ、カスミカメ類、クモヘリカメムシで多かった。
- (2) イネカメムシについて、一部地域では出穂した「あきたこまち」のほ場で多数の発生を確認しており、また県内各地の出穂前の水田においても発生を確認している。
- (3) 7月上旬の巡回調査における畦畔雑草のすくい取り調査（42地点84ほ場）において、斑点米カメムシ類の平均捕獲数が22.96頭（平年14.86頭、前年12.67頭）と、過去10年間で2番目に多かった（表2）。多くの種で、捕獲数はやや多い～多い状況であった。

表1 斑点米カメムシ類の7月上旬本田すくい取り調査結果（1ほ場あたりの平均捕獲虫数）

種類	発生量	本年	平年
ホソハリカメムシ	並	0.12	0.09
クモヘリカメムシ	多	0.65	0.26
シラホシカメムシ類	やや少	0.02	0.05
イネカメムシ	多	0.65	0.04
カスミカメ類	多	1.12	0.41
ホソナガカメムシ類	並	0.01	0.01
ミナミアオカメムシ	並	0.01	0.03
合計	多	2.57	0.88

（平年：平成26年～令和5年の平均値）

表2 斑点米カメムシ類の7月上旬畦畔すくい取り調査結果（1ほ場あたりの平均捕獲虫数）

種類	発生量	本年	平年
ホソハリカメムシ	やや多	0.81	0.50
クモヘリカメムシ	やや多	0.52	0.32
シラホシカメムシ類	多	0.35	0.18
イネカメムシ	やや多	0.05	0.03
カスミカメ類	やや多	20.70	13.86
ホソナガカメムシ類	やや多	0.51	0.15
ミナミアオカメムシ	やや少	0.02	0.05
合計	やや多	22.96	14.86

（平年：平成26年～令和5年の平均値）

#### 4 防除上注意すべき事項

(1) イネカメムシ対策として出穂期(※)に薬剤防除する。また、イネカメムシ及び他の斑点米カメムシ類の対策として出穂期防除の7日から14日後頃(イネカメムシの発生が多い場合は7日から10日後)に追加で薬剤防除する。さらに、その後も斑点米カメムシ類の発生が多い場合は、必要に応じて追加防除を実施する。

※出穂期：ほ場全体の4～5割の茎から穂の先端が出た日

(2) イネカメムシに対する薬剤は表3のとおり、水溶剤、液剤、フロアブル剤等が効果的である。

(3) 一部の地域ではエチプロール水和剤(商品名：キラップフロアブル)でイネカメムシに対する感受性が低下している事例が生じていることから、防除薬剤の選定については地域の指導機関等に相談する。

(4) 出穂2～3週間前までに、斑点米カメムシ類の発生源となる水田畦畔のイネ科雑草の除草を実施する。ただし、出穂直前の除草は本田にカメムシを追い込むおそれがあるため注意する。

(5) 水田内で穂をつけたヒエ類及びイヌホタルイは、斑点米カメムシ類の発生を助長するので除去する。

表3 稲の斑点米カメムシ類(イネカメムシ)に対する主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	本剤の使用回数	IRACコード
スタークル/アルバリン顆粒水溶剤	収穫7日前まで	3回以内	4A
スタークル液剤10			
エクシードフロアブル	収穫7日前まで	3回以内	4C
キラップフロアブル(注)	収穫14日前まで	2回以内	2B

(注) キラップフロアブルは本県一部地域でイネカメムシに対する感受性低下を確認しているため、感受性低下を確認している地域では使用を控える。(4(3)参照)

成分ごとの総使用回数に注意する。

IRACコードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。

IRACコードの詳細は、[https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/mechanism\\_irac03.pdf](https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/mechanism_irac03.pdf)を参照する。

薬剤の使用に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。

#### 5 連絡先

愛知県農業総合試験場環境基盤研究部病虫害防除室

電話:0561-41-9513